

ハンドボール界における中東の笛問題に関する一考察

A study on the whistle of the Middle East issue in handball

1K07B801-1 岸部 敬

主査教員 友添秀則先生

副査教員 石井昌幸先生

1. 研究の動機

私は中学一年生の時にハンドボールという競技に出会い、現在まで10年間この競技を専門に続けてきた。本大学に入るきっかけを与えてくれたのもハンドボールである。本大学に入ってから様々なことを学んだり、たくさんのスポーツを観る中で、私はハンドボールで2008年に起こったある問題について興味を持った。

スポーツは様々な競技があり、審判が存在する競技・しない競技（ゴルフなど）があるが、審判が存在する競技において、審判は絶対的な力を持っており、競い合う選手・チーム全てに平等、公平にその競技を開始、運営、終了させるために大きな影響力を持っている。よって審判は原則として一方の選手・チームを勝たせるために、ジャッジを一方だけ意図的に優位に進めたり、ゲームを操作することは許されないものである。ハンドボール界では、オリンピックや世界選手権の予選で中東の国々が、審判員を自分たちの優位にジャッジするよう変更・操作し、その試合に多大な影響を与える中東の笛という問題を抱えていた。これは2007年の北京オリンピック予選でも大きく問題となり、その結果史上初の再予選が行われるなど、大きな話題を呼んだ問題でもある。この問題は2007、2008年に大きく取り上げられたが、それ以前から同様の事件が起こり、日本を含めたアジアの国々は、国際大会予選で中東の国々（クウェートなど）に勝利することができないでいた。スポーツにおいて審判は公平な存在であるはずが、このような問題が起きてしまうとその存在意義を疑うものになってしまい、そのスポーツをする選手・チーム・国々までの信頼も失われてしまう可能性がある。本研究では、その原因や背景・各協会の対応等の調査を中心に、同様の事態が起こらないよう今後の対策についても考えたい。

2. 研究の目的

本研究では、なぜ「中東の笛」問題が起きたのか、原因やその背景、各協会と関係国とのパワーバランス、なぜ2007年の事例についてだけ明るみになったのかなどを明らかにし、今後の対策等についても検討するものである。

3. 概要

第一章では、アジアにおけるハンドボールの発展に関する検討として、中東の増え問題が起きる背景・原因を整理するために、アジアハンドボール連盟の発祥からアジアハンドボール界のその後の大会、2007年北京オリンピック予選に至るまで、第一節、第二節第三節と時間軸に沿って述べていく。特に問題の争点となるジャッジ・試合操作を行うとされる中東、クウェートとの各国の試合、クウェートが出場した大会が結果どうなったのかなどにも焦点を当てていく。

第二章では、北京オリンピック予選における中東の笛問題の実態として、メディア等でもっとも話題となった2007年北京オリンピック予選での中東の笛問題を第一節で取り上げ、それがどのような経緯を経て2008年北京オリンピック再予選になったのかということ述べていく。その再予選に至るまで、各ハンドボール連盟、協会の動きだけでなく、再予選が決まってからのメディアやどのような問題が起きたか等にも触れ、その大会が結果どうなっていくかについて述べていく。

第三章では、中東の笛問題の検討として、第一節では再予選大会後とその後の各連盟、協会の対応等を、第二節では再予選の結果により、出場が決まった北京オリンピック・IHF最終予選について述べていく。そして、第三節では、中東の笛問題について、結果的に何がきっかけ、何が原因として起きてしまったのか、原因・背景整理をしながら今後同様の出来事がハンドボール界、また競技において発生しないように、今後の対策と方向性について述べていく。

結章では、本研究のまとめと今後の課題について述べ、今回の出来事と反省から、これから解決すべき問題を提言する。